



撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

## 撥雲洞トンネル

京都府宮津市字波路／字上司

明治期の廃藩置県を経て、京都府は南北に長い地形を有することになった。日本海側の宮津港は海運の要衝であったため、宮津から京都の町に物資を搬送する基幹道路の整備が急務となる。京都と宮津間の往来には二泊三日を要し、冬季には通行が遮断される区間もあったという。府は一八八二年、京都宮津間車道開鑿工事を始める。一方、その二年ほど前から計画されていたのが栗田峠の開削だ。既に与謝郡波路村の売間九兵衛が私財を投げ打ち、付近住民にも資金提供を呼びかけて峠の開削に着手していた。

撥雲洞トンネルは、この事業の一環として穿たれた隧道だ。売間は水力によって峠を切り下げる計画を立てる。峠の頂に貯留した水で掘削した土砂を流下させる奇策だ。ユニークというか無茶というか、しかし既に峠の頂上まで水を引く水路は完成していた。ところが、その後の資金調達は困難を極める。京都宮津間車道開鑿工事が公共の事業となったことから工事は府に継承され、工法も切り下げから隧道工事に変更された。

着工は一八八四年。延長一二六尺、幅員四・七尺。坑口は花崗岩の石造で、馬蹄形断面の両サイドに江戸切仕上げのピラスター（付け柱）を擁する堂々とした佇まいだ。また、この花崗岩の余材で、宮津城下大手橋が石造橋に架け替えられ、同時期に竣工。一八八六年八月四日にトンネルと大手橋の開通式が行われた。

売間はトンネルの開削事業に、付近住民とともに完成まで関わり続けたという。坑口に立つとその上には鬱蒼とした竹林、奥からはひんやりとした風が吹き抜けてくる。基幹道路の建設を痛感していた売間の胸中を想う。東側（京都側）坑口の扁額には「農商通利」とあった。国登録有形文化財に指定された隧道から、売間の言伝が聞こえてくるようだった。



売間九兵衛は開削工事のために莫大な負債を抱えてその財産をほとんど失ったが、家財を売却し負債の返済を続けたという。隧道完成の約20年後、その偉業を称えるため運送業者有志によって「隧道開鑿主唱者 賣（売）間九兵衛翁之碑」が建立された。売間は波路村を離れ舞鶴に転居、石碑建立の3年後に67歳でその生涯を閉じた。